

解 答

問1 職人の作は平凡と卑しみ、美術家の作は非凡と尊ぶ見方

問2 ウ

問3 ウ

問4 ウ

問5 エ

問6 エ

問7 エ

問8 エ

問9 エ

問10 エ

問11 エ

問12 エ

問13 エ

問14 エ

問15 エ

問16 エ

問17 エ

問18 エ

問19 エ

問20 エ

問21 エ

問22 エ

問23 エ

問24 エ

問25 エ

問26 エ

問27 エ

問28 エ

問29 エ

問30 エ

問31 エ

問32 エ

問33 エ

問34 エ

問35 エ

問36 エ

問37 エ

問38 エ

問39 エ

問40 エ

問41 エ

問42 エ

問43 エ

問44 エ

問45 エ

問46 エ

問47 エ

問48 エ

問49 エ

問50 エ

問51 エ

問52 エ

問53 エ

問54 エ

問55 エ

問56 エ

問57 エ

問58 エ

問59 エ

問60 エ

問61 エ

問62 エ

問63 エ

問64 エ

問65 エ

問66 エ

問67 エ

問68 エ

問69 エ

問70 エ

問71 エ

問72 エ

問73 エ

問74 エ

問75 エ

問76 エ

問77 エ

問78 エ

問79 エ

問80 エ

問81 エ

問82 エ

問83 エ

問84 エ

問85 エ

問86 エ

問87 エ

問88 エ

問89 エ

問90 エ

問91 エ

問92 エ

問93 エ

問94 エ

問95 エ

問96 エ

問97 エ

問98 エ

問99 エ

問100 エ

解説

出典は、柳宗悦の文章。

問1 まず「こういう見方」とは、「職人が作るもの」や「美術家の作るもの」に対する「見方」であることをおさえます。それぞれに対しどんな「見方」をしているのか?と問い合わせながら、傍線①の前をたどつていくと、「職人の作つたものは平凡であり、美術家の作るものは非凡である」という部分が見つかります。この部分をベースにして、この直前の「前者(=職人)を卑しみ、後者(=美術家)をのみ尊ぶ」の内容を加えてまとめます。

問2 「さてこのような工人たちが作る品物は、どんな性質をもつのでしょうか」と書かれた文に着目し、これよりも実用を旨として作られている、「用いられるために作る」、「実用的な工芸品」、「用途のために作られる器物」、「日々用いる器物」などという表現が見つかります。これらを基に判断すれば、「正しい品物」とは、「使いやすく実用性に富んだ品物」ということになります。アモイもエモ、いざれも本文中には書かれていません。

問3 A:「この段落の主語は「彼ら」すなわち「職人」あるいは「工人」です。それをここでは「船」にたとえていります。B:傍線③の4行前の「(職人は)祖先の知恵や経験に助けられて、力ある仕事を成し得た」の部分が、「(B)が、仕事をする上での大きな支えとなっている」という部分とほぼ同義になっています。C:「(C)がBの「祖先の経験や知恵」の言い換えであることを念頭において、※印の部分をチェックします。「それが彼ら(=職人)に仕事をさせている」の部分が、「(C)が、自分ひとりでは成し得ない仕事を確実なものにしている」という部分と同義です。「それ」は「大きな伝統の力」を指します。また、「(職人は)大きな伝統の力に支えられている」の部分からも読み取れるでしょう。

問4 「自分の名を誇らないような気持ち」には、「邪念が近づかない」と言っているのですから、「邪念」とは、その逆であることがわかるでしょう。つまり、「自分の名を誇らうとする(思い)」です。

問5 傍線⑤の直後に「なぜなら実用品は純粹に美を現したものではなく、用途に縛られたものに過ぎぬと考えられるから」と理由が説明されています。ア、イ、ウは、いずれも本文中からは読みません。

問6 X:「実用品」は、機械で大量生産されたような「醜いもの」と異なり、職人が一つ一つ心を込めて作り出したものであり、また、ぬくもりも感じられるのですから、「機械」の対極にある「手」が適切であると言えます。①:…

「職人」には、「仕事への誇りがある」、「正しい品物を作るそのことに、もっと誇りがある」、「彼ら（＝職人）は品物で勝負をしている」→「自負」。②：「実用品」を日々の暮らしの中で使い続けていくことによって、つまり、「生活にまじわることによって、かえって美が深まり」り、日常の暮らしの中にも「潤い」が生まれてくるはずです。→「趣き」。③：「私たちの【③】に働きかけ、心を豊かにしててくれる」とあります。心が豊かになるには、物事を心に深く感じ取る働きが必要です。→「感性」。ヨ：「日々の生活こそはすべてのものの中心」であり、「日々の生活」の中に、「文化の根元」も潜むと言っています。→「文化」。

〔二〕出典は、柏谷知世「ひなのころ」。

問1 （1）「水に流す」とは、「過去のいざこざなどをなかつたことにする」という意味です。（2）「図星をさされる」とは、「人に指摘されたことが、まさにそのとおりであること」を言います。（二）では、優子に風美の弱点をぴたりと言ひ、当てられたことを指します。「図星」とは、「目当ての所。急所」。（3）「せせら笑う」とは、「ばかにして笑う。あざけり笑う」という意味です。

問2 藤崎さんは転校から二、三日で、クラスに溶け込み、みんなの憧れの対象でした。ただ一人、優子だけがいつもでも藤崎さんの悪口を言つていて、風美も入つてはいる自分が仕切るグループの女の子に、「藤崎さんに近寄ることを禁じた」のです。そのため、風美は優子に見つからぬないように、こつそり藤崎さんの家に遊びに行つたのです。

問3 去年のお祭りの日のことが書かれている部分をおさえます。はじめの方の「昨年のおてんの祭、二度と口きいてやんない」までの7行です。優子が「風美との約束を忘れ」ていたことは、河上のおばさん（優子のお母さん）が謝りながら伝えてくれたのであって、優子本人は、テレビに夢中で「謝り」もしなかつた、ということが去年のお祭りの日にはあつたのです。

問4 風美の胸が波立った理由は、傍線③の直後に「優子の隣に、白い服を着た女の子が自転車のハンドルに手をおいて立つてはいることに気がついたから」と書かれています。「白い服を着た女の子」は藤崎さんです。悪口を言つてはいた藤崎さんと優子がいっしょにいて、しかも「親しげに笑つていた」様子を目撃した風美の心はゆれ動いたことでしょう。心が「動搖」したのです。また、二人の様子を見て「不安」も感じたことでしょう。

問5 「ほつとした気分」→「優子は、風美があらかじめ藤崎さんと約束していたことなど何も知らないようだった」ので、気づかれずにすんだと安心したから。〈面白くない気分〉→いつも藤崎さんの悪口を言つて嫌つてはいたはずの優子が、藤崎さんと親しげに笑い合つてはいたのを目の当たりにして、これまで優子の目を盗んで築いてきた藤崎さんとの友達関係に、優子が入り込んできただよに思はれたから。この二つを合わせてまとめます。

問6 直前の「藤崎さんも藤崎さんだ」という言い方に着目します。藤崎さんはわたしと約束したにもかかわらず、優子と約束をしたかのよう親しげにしている様子を見て、風美は、藤崎さんを優子にとられてしまつたようを感じ、このように嫉妬とも不満ともつかない気持ちにかられたのです。→ウ。イ：「わたしと二人だけっていう約束」→×

問7 「一仕事すんだ」という言い方から、「自分たちのやるべきことは取りあえずやつた」という感じが込められていることをつかみましょう。したがつて、「面倒ではあるが当然のこと」をやつた、と解釈できます。→イ。エ：「無意味に感じている」→×

問8 傍線⑥の前後に書かれている、優子が風美を結構きつい言い方でからかっている様子を、心の優しい藤崎さんはどのように受けとめていたでしょうか？ そうした点から考えてみましょう。

問9 エ：「藤崎さんが、風美と自分とが仲良しだと勘違いしていることが不本意」→×。「その誤解を解こうとしない風美を許せない」→×

問10 傍線⑧より少し後の〈中略〉以降をしつかり読んで考えます。井戸の中を覗いては駄目だと思うのは、井戸の中に何か見てはいけないもの、何か見たくないものが入つてはいるからだと推測できます。その見当でさがしていくと、「この井戸には何か悪いものが閉じこめてある」と書かれている部分が見つかります。また、こうした目に見えないものが閉じこめられていると思えるということは、目に見えないものを信じてはいることにもなりますし、また、覗いては駄目だと思うということは、それをおそれ敬うということにもなりますね。→エ。

問11 ア：この話は風美を中心に進めています。→A。イ：「地方の風俗や民間信仰と結びつく人々の姿を背景として」→B。ウ：「普段の人間関係から離れ、三人の少女が成長していく様子を細やかに表現している」→B。エ：「比喩表現が効果的に用いられており、作品に幻想的な雰囲気をそえている」→B。オ：「会話以外の文からは客観的な事実が読み取れる」→B。